

## つながりの新しいかたちへ

土井 隆義 (筑波大学人文社会系教授)

人とは本来的に孤独な存在である。その孤独を実感してこそ、他者と真に惹きあう存在となりうる。孤独を嘔みしめつつ、自己と向きあった経験のない者は、自分が何者であるかを掴むことができない。自分が何者であるか分からない者は、自分には欠けているものを、他者のなかに見出すこともできないだろう。

ところが、現在の日本では、その孤独を味わえる機会が、私たちの日常から失われつつある。代わって増えているのが、孤立に苛まれる経験である。両者は同じに見えて、じつは異なるものである。孤独の眼差しは自分を見据えており、自らが主体的に選び取ることもできる。しかし、孤立の眼差しは他者を希求しており、自らが客体として追い込まれるものである。では現代の日本人は、なぜ孤独を味わう機会を逸し、孤立に苛まれるようになったのだろうか。

私たちは、社会を近代化させていく過程で、旧来の制度や規範へのこだわりを弱め、それらに縛られない多様な価値観を持つようになった。その結果、地縁や血縁などの伝統的な共同体も、あるいは学校や職場のような社会的な団体も、かつての強い拘束力を徐々に弱めていった。友人関係のような自発的に作り上げられる集団ですら、その自由度をさらに高めていった。

それ自体は決して悪いことではない。現在の日本では、たとえば30歳を過ぎて独身でも、世間から白い目で見られることは少なくなり、またコンビニなどが普及して、単身者でも生活しやすい社会になった。し

かし、そうやって人間関係の自由度が高い社会になったからこそ、逆につねに誰かとつながっていなければ安心できなくなっている。そして、もしそれができないと、自分は価値のない人間だと周囲から見られはしまいかと他者からの視線に怯え、また自身でも、自分は価値のない人間ではないかと不安に慄くようになっている。

自分が好まない相手との関係に縛られることがないという事情は、当然ながら相手の側にも同様に当てはまる。関係が自由化すると、たとえ制度を同じくする者であっても、相手が自分と付きあってくれる保証はなくなる。既存の枠組みに人間関係が縛られないことは、その枠組みが人間関係を保証してくれないことでもある。付きあう相手を自分が選択できる自由は、その相手から自分が選択してもらえないかもしれないリスクとセットなのである。

そうしてみると、東日本大震災後、盛んに唱えられるようになった「絆の大切さ」の裏にも、この流動化した社会を生きる現代人の大きな不安が潜んでいることに気づく。お互いの絆を大切に助けあうことは、たしかに素晴らしく尊いことに違いない。しかし、固く結束していかなければならないという圧力が、かえって私たちの孤立感を煽っている側面があることも否定できない。だとしたら、いま私たちが追求めるべきなのは、狭く固く結束した絆の復活ではなく、むしろ広く緩くつながりあって、たとえ一人でも気後れなく生きていける社会の実現ではないだろうか。